

橋 本 勲

『商業資本と流通問題』

ミネルヴァ書房 1971.11 307 ページ

I

本書は、商業と流通の現実的諸問題に対する鋭い問題意識を秘めつつも、その科学的分析にとって不可欠の前提をなす原理的考察をくわえたものであり、商業経済論の分野における久しぶりの労作である。

本書の「中心的部分」たる第1編では、商業資本研究の方法、商業資本の本質・利潤・回転および商業労働に関する理論的説明がおこなわれている。これに対し第2編は生産的労働の研究にあてられ、第3編は流通費用に関して理論的考察をくわえた3つの章と、配給費用の歴史的増大傾向という現実的問題を取り扱った——本書ではやや異色の——2つの章からなる。この構成からもあきらかなごとく、本書はいわゆる体系的な研究書ではない。むしろ商業と流通に関するいくつかの重要な理論上の問題を取り上げ、諸説批判を展開しつつ、著者独自の見解を積極的かつ大胆に提示した論争の書である。

本書全体を貫ぬく基本的観点は「方法論的考察」の章において詳細に示されている。著者はここで、「プラン問題」をめぐる論争の成果をふまえたうえで、いわゆる上向＝論理的展開の過程における論理段階の相違の明確化とそこから生ずる諸規定の逆転関係を強調する。この指摘は重要である。もちろん、ヨリ抽象的・本質的段階の諸規定がヨリ具体的・現象的段階において逆転してあらわれること自体は経済学上の常識である。しかし、商業経済論の分野においては、従来ともすればかかる観点が稀薄であり、問題の究明にある種の混乱が持ち込まれる可能性があっただけに、著者がはじめてその重要性を力説した点は高く評価される。今後の研究は多かれ少なかれこの点を明確にしたうえで進められなければならない。

II

しかし、著者は以上のごとき基本的観点をたんに提示しただけではない。それを重要な理論問題の究明において驚くべき一貫性をもって貫ぬいているのである。たとえば、サービス労働が生産的労働であるか否かの問題に関して、著者は「論理的考察」として以下のような独自の見解をのべている。「一般的規定＝使用価値観点が

らすれば、サービス労働は不生産的である。しかるに他方、歴史的規定＝剰余価値観点からすれば、生産的である」(136 ページ)「サービス労働は〔「資本一般」・「社会的観点」・「産業資本の観点」からの〕本質論的規定においては、不生産的労働であっても、〔「競争論」・「個別資本の観点」からの〕現象論的規定においては、生産的労働となって逆転しうる」(139 ページ)。そして「経済学的な性格規定の問題としては、サービス労働は不生産的として考えるべきである。サービス労働は使用価値も価値も生まない。したがって社会的観点からは不生産的であり、国民所得を創造しない。」このように「一般的規定」は個別資本の観点からする規定に対し「批判の基礎」をあたえる。しかし著者は、「計算技術的な問題としては、国民所得の計算にあたっては、サービス部門の所得をも算入すべきであろう。」(159 ページ)とし、ここでも論理段階の相違にもとづく逆転が生ずることをあきらかにしつつ、その理由を説得的に説明している。

このような著者の見解は、バリツェフ、野々村一雄、山田秀雄氏らの所説を基本的に継承しつつも、それをヨリ精緻化・発展させ、研究を新たな水準へ引きあげるうえで重要な貢献をしたものといってよい。しかし他面では次のような疑問も生ずる。すなわち第一に、論理段階の相違したがってまた逆転を強調したことはまったく正しいにもかかわらず、それゆえにかえって両段階の相違があまりにも明快にされすぎてはいないであろうか。その結果、両段階の間に断層を生ぜしめているかのごとき印象をうける。換言すれば、両段階を結びつけ、「本源的規定」と「歴史的規定」との真に弁証法的な統一をあたえる内在的論理展開、したがってなぜ、またいかにして逆転するのか、という点の説明が稀薄になっているように思われる。そしてそのことが、一方では所説を明快にしているものの、他方ではその説得力を弱める役割を果しているのはまことに惜しまれる。もちろんそれは本書が論争書であることにもとづく制約でもあろう。

さて第2に、生産的労働論のみならず本書全体について指摘できるのであるが、「資本一般」が『資本論』I・II巻に相当し、「競争論」をIII巻(ときには「商業資本自立化以後」の段階ともされている。たとえば41 ページをみよ。)とする著者のユニークな見解にはとうぜん疑問が生じよう。

著者自身が主として依拠している佐藤金三郎氏の秀れた研究によってあきらかにされたごとく、『資本論』は競争等に関する基本規定が含まれるようになり、当初の計画よりもいっそう内容が豊富化・充実したとはいえ、

「資本一般」の分析体系としての基本的性格を有する。橋本氏が『資本論』のかかる基本的性格に言及しながら(60 ページ), しかもなお事実上それを無視し, このような大胆に単純化したシェーマを設定しているのは理解しがたい。かかる誤解をうけやすいシェーマの設定は, その基本的観点を貫ぬくうえで必ずしも必要でないだけに, とりわけそうである。いやむしろそれは著者の見解を積極的に提示するうえで有害な役割を果たしているようにさえ思われる。

III

流通費用の資本化をめぐる宇野・森下論争に関し, 著者は上述のシェーマによりつつ次のように「結論」する。「宇野教授の疑問, すなわち産業資本がみずから商業活動をおこなうばあいには流通費用は費用としてあらわれ, 商業資本が商業活動をおこなうばあいには流通費用も資本として平均利潤率の形成に参加するという問題提起は, まさに『産業資本の観点』=『資本一般』と, 『個別資本の観点』=『競争論』の論理段階の相違にもとづく疑問といえることができるであろう。すなわち, 『資本一般』の論理段階においては, 流通費用は費用として, しかも社会的空費としてあらわれ, 剰余価値からの控除になる。しかし『競争論』においては, 事態はまさに逆転してあらわれる。流通費用は商業資本にとって, すなわち個別的資本にとっては, 資本となって利潤の源泉としてあらわれるのである。」(引用 A。第 2 章, 62 ページ。また 54—55 ページも参照せよ。)

しかるに他方第一章では次のような主張もみられる。(森下氏の主張するように)宇野氏の所説が, 「『競争論』の論理段階を前提として展開されているのであるとすれば, 産業資本が『商業活動』をおこなうばあいても, 流通費用は費用としてではなく, 資本としてあらわれるわけであるから, 森下教授の宇野説批判が妥当することになる。」(引用 B。37 ページ。)

上記引用 A・B は一見して明白なごとく, インコンシステントである。なぜなら, 宇野説が「競争論」を前提しているとすれば——そして事実前提しているのであるが——引用 A はまったく無意味な主張となるからである。しかるに著者のシェーマからすれば, 引用 Aこそが本来的主張とならざるをえない。この矛盾を避けるために, 橋本氏は何よりもまず宇野氏の問題提起がいかなる論理段階でおこなわれたものであるかを改めて確定し, そのうえで主張を首尾一貫させなければならなかったはずである。しかしその課題は, 評者のみるところ果たされていないように思われる(36—38 ページ参照)。そし

てこの第一章は, 明快な展開がおこなわれている第 2 章以下に比し, 著しくあいまいかつ折衷的となっている。

しかしいまその点は問わないにしても, 著者の本来的見解たる引用 A にはいくつかの疑問が生じる。まず第一に, 産業資本みずからが商業活動をおこなうばあいを, 著者のいう「資本一般」の論理段階にあるとするのは疑問ではなからうか。したがって第 2 に, 宇野・森下論争をたんに「資本一般」と「競争論」との論理段階の相違に解消することによって両者の見解をいわば相対化しつつ整理することには無理があるのではなからうか。第 3 に, 森下氏の指摘するごとく, 著者のいう「資本一般」の段階では社会的再生産との関連における流通費用の基本的性格のみが問題になりうるのであって, その負担関係の問題はいまだ捨象されていなければならない。しかるに引用 A ではそれが問題とされうるかのようであり, それゆえにまた逆転が主張されているのであるが, この点は疑問が残る。それとともに, 引用 A では——そして引用 B ではいっそう——流通費用資本化の根拠(逆転を認めるとしてもそれは根拠になりえない)の解明は残された課題となっているように思われる。

最後に, 副次的な点であるが, 著者は商業労働(第 4 章)および運送費用(第 7 章)の解明にさいし, 流通過程を「価値実現過程と使用価値実現過程との二側面」から捉えようとしているが, 使用価値の実現とは消費の過程でおこなわれるのであるから, 適切な用語法とはいえない。むしろ「使用価値としての商品の実現過程」とすべきであろう。

以上, いくつかの問題点を指摘したが, 著者が商業経済論の分野における困難な諸問題と真正面から取り組み, 独自の見解を積極的に提示された功績は大きく, 今後の研究の進展に大きく貢献するであろう。著者がさらに研究を進め, 体系的な研究を公刊されることを期待したい。

【中 野 安】

江 見 康 一

『資 本 形 成』

東洋経済新報社 1971. 3 xxx, 349 ページ

(長期経済統計 4)

明治以降の日本経済の成長過程について新しい fact finding を行うために, 長期統計的な観察は是非必要である。このような目的のもとに, 長期経済統計シリーズ